

伊  
藝  
騷  
動  
實  
錄  
四

~ 13  
3310  
4止



門 へ 13  
3310  
卷 4

伊達 賊臣紀 卷之第四十五



大正十年八月廿九日  
本大學出版部 贈

酒井 撤之 館之 對受之事

附原 田甲斐 伊達 守 齋 好 尚 之事

以 田 舟 祀 大 高 力 之事

附 越 尾 六 兵 衛 切 之事

斯 而 酒 井 雅 白 樂 園 撤 所 禮 威 為 所 在 中 始 時 之 後  
役 人 不 殘 三 月 廿 七 日 酒 井 撤 之 館 之 集 事 乃 元 己 之 中  
刊 之 至 下 之 和 子 原 田 甲 斐 伊 達 守 齋 齋 好 尚 之 事





を安侍の忠臣の胸を刺せり為あり別及忠臣の故を  
細述一通の旨を教曉す。所被見阿色よと云ふ所の懐  
申す一應天朝の旨に依りておるお病を近寄と見下す。十日  
後、い言執事お初れと云ふ早、午、五言光、一日飯前小  
まくと切敷る安病を急ぐ油断多しれ、油を光り見る  
とくと狼狽せりと病指の事を減れは運常、安病家  
し、中、病者も余令二つ十威る血煙り、下川たぐ  
免長成、改方あり、伊達よの病を重宝、三年、平、八歳、  
病癒、多中、一人、病癒ある君家、逆長、退、事、一、年、

子年、美、昔、天、理、叶、以、切、成、名、を、差、中、く、病、を、至、る、初、歳  
い、め、を、命、を、差、中、後、子、孫、の、面、を、恨、み、而、已、是、の、身、を、只、也  
丸、陰、の、病、を、一人、一、巻、あり、病、者、余、れ、其、病、者、一、七、り、其  
問、他、志、多、り、年、五、言、光、の、祈、世、を、我、子、多、り、安、病、定、三、つ、六  
久、く、忠、臣、を、害、易、殺、害、一、言、社、是、非、多、り、也、れ  
宗、田、外、記、大、常、の、事、

伊達、病、者、多、り、事、  
去、程、千、石、田、甲、斐、の、伊、達、よ、の、病、者、を、只、一、口、切、殺、し、為、る、密、約  
あり、一、口、血、口、引、提、要、を、一、口、切、入、り、と、せ、り、一、時、之、途、隔、り











子死すに死すなりと云はれり方骨に殘念思ふなり一親  
先別ある多し之に甲好の言貴を悲れし一之を  
所好し一如何極多言狼藉及之一親身病多時大  
老し馬思を絶し一為子代擧げ有阿一うるなり其  
方有人命を控へ取るる故に福多し事別ある  
う御侍に阿なり一その威を多し一これ等  
古月志より可を見り一志より阿月派少神を並  
家小板裏内張正殿初深き思ひ事一各伴連取  
事多明多し一大概幸能事代擧げを控へ以候

丹は多し合明あり親身との心なり一  
其内、茶茶如生板案擧げ自身之茶碗を多し柴田  
擧げ多し一天明龜子代擧げ果報人其なり一果  
報擧げ多し一其子細多し其方多し一親戚忠良有る家風  
多し事一多し世上親し一むると云はれ其常一乘り多し一  
如何、面首多し水も天下に執権の列を擧げ多し其  
其女西人の忠御に志を感入るの案より自身茶碗を多  
画未起水と只候と多し傳多し頻り一と水原派多し  
水、双記多し眼を細り阿なり一其方神多し一親身



















吾やんといふと敬れは只今其是後思ふ而已某道  
すりといふ思ふを思ふは先づ得るは其他人教集集  
をよみて読便に事や斗はる小志ありといふは其れを  
原罪に二文安藤藤原公成の節に事やするは早也  
道に云と成るは其は付君軍に非余を是く戒められ  
水は煖しる事あり是は事あり人事は事あるは思ふ  
事ありは漢は其は思ふは斗はるは國に強弱を補  
思ふは事ありは事ありは事ありは事ありは事あり  
急に起して其は事ありは事ありは事ありは事あり

等の時小荀成大集を云はれ其後其の孫に其は其  
一の時小荀成大集を云はれ其後其の孫に其は其  
よのとき事ありは事ありは事ありは事ありは事あり  
左の事ありは事ありは事ありは事ありは事あり  
四文を云はれは事ありは事ありは事ありは事あり  
今も事ありは事ありは事ありは事ありは事あり  
逢原四月初母芝名形跡は母田中一云川將監初と  
一々令後之事は事ありは事ありは事ありは事あり  
一々令後之事は事ありは事ありは事ありは事あり

花の如く梅田の如く... 故病氣と稱す... 勘面の上は... 事... 水... 古... 一... 一...

臣死すと... 下君忠を... 建安の... 水心易... を... 今... 音... 大... を...













按て形之尚討中延引せしうん志を入て屏を伺志ふか  
團におきかへ白之城の所を放たせし増屋のり合防さ  
を踏んとてうりたて騒所ん其軍道とて人殺を初  
不意を討ふは城をさふたふぬまてしも大之敵に余  
を合ふと討所ある勢一應あつて追拂味方未と  
大威強升とあふんとて也軍運指しつて供も息を余  
い後軍之及ふ者限り戦を切指するも其合は心を能  
討死しつて命を後記に留ん小何て張巻のりて進道  
算ふしつて防兵の地制も多事もあつて其を延る

死つて人々傷を以て身と心とを遺言をりて一陳多事不  
因大勢是を争うて形を自後する如くも其然りて何人  
あつて皆つて命とて四人一辨を伺ふに得心し志を人に見  
つて防人ありてはるハ九人の死に及ぶ所思ひつて供も  
さふ所下上と形をさふ事一其と其に防兵一其に  
進軍をさふ由并に雲丸橋其法に果を以て防に心雪  
死たれを初つて後何んか思ふに能名を殉忠孫氏  
病も程重なり常小正堂とあふぬとの有つて死後  
捨とる者具し一形をさふ事一その後をいふと其









如何思慮者——今夕——の来り外場——橋引——と  
及之令者丸門近——違——下尺橋——少進——即——取——生——生——人——似  
志——事——た——る——り——と——名——丸——門——番——之——本——は——勇——一——也——了——新——日  
下流者在外——箇——之——使——斗——く——内——は——通——一——原——田——大——花——足——舟——橋  
間——本——對——面——く——得——く——強——尋——者——丸——三——河——等——く——人——は——實——小  
重——脚——上——入——り——志——以——校——而——急——く——流——る——の——如——也——甲——刑——は——差  
於——下——流——死——之——後——是——地——を——述——る——原——由——一——主——祭——也——花——城——一——理  
及——く——少——壯——心——存——威——入——早——進——討——子——首——向——一——戦——平——橋——を——  
交——せ——令——事——ハ——勿——論——為——り——候——一——違——下——流——案——を——述——る——小——此——所

而——く——也——地——を——先——以——以——是——度——一——件——初——難——く——之——君——也——此——後——不  
之——事——一——る——り——此——系——者——何——く——違——候——下——主——君——之——を——引——お——る——を  
也——是——事——一——ハ——不——急——く——之——り——而——一——但——一——親——の——原——由——と——し——て——通——れ  
親——一——而——身——を——安——め——ふ——わ——の——能——得——也——候——事——思——は——候——様  
身——を——通——之——と——す——一——は——忠——臣——儀——也——一——而——く——也——交——り——る——は——原——由  
字——之——様——と——存——候——様——又——甲——刑——違——候——事——在——り——下——候——事——神——以——實  
言——を——知——り——候——様——候——様——也——一——而——已——其——上——甲——刑——所——由——等——  
内——事——者——捕——心——事——々——交——り——一——事——一——は——一——家——中——に——誰——か——取——下——の  
上——に——一——物——上——に——存——候——様——今——更——兼——略——し——心——掛——是——候——様——也









初を信自のふる多のれ其を有之の家を拂れ一  
早宗のふる一旅に死する多のれ一を以親父甲也  
之信情に依り合をらふと一己をふたに考他  
大縁を結ぶ一以厚恩海山之誠多る事  
有少歳之身を病と一是後何れ一以爲向  
を入ると云ふ退か一多る智謀一常と云ふ事

東田兄弟相愛之事

阿三傳東田兄弟と同善之事

東田大翁兄弟は山阜人退かせし政々の三傳對面

次男小山内能達也先列兄弟は一と云ふ海より小至年  
匠海切の匠傳候事と云ふ一傳に老長匠山阜人  
肉體の也一其業深ク多し一同心也其是事  
運者一其多事あり一是事不及彼甲一傳あり  
云々多し然意也如之近年大翁後見と云ふ事  
但是也其我之其見肖如之一傳に其業深ク  
志死後也其志死後也其志死後也其志死後也  
其志死後也其志死後也其志死後也其志死後也  
一今方之事を始知候に其道を塞り云々の事



小重郎何進退者及角一後之志高遠之入利獵  
作之是を不毛と称し、鶴や氏と多るく下の段際於  
たよりや小重郎に代り一紙の神を以て懐之得合あり  
と答はる之男成意に近進物此上の疑小重郎宗一保我  
之信少重郎の信を頼り此自ら之れを有るべし、伊達之部  
宛て之を以て之れに代り一紙の神を以て懐之得合あり  
つに元君に為るを志して命を落し之れに迷悟を思  
ふ余も亦其に長たるく道我の如く正まらず能知事  
事一も伊達之信頼り之れを以て成る一若く血氣之南

し自ら之れを以て小重郎を達せしれ而も小重郎何進退  
こと一も伊達之信頼り之れを以て成る一若く血氣之南  
一も伊達之信頼り之れを以て成る一若く血氣之南  
撒揮下れを頼り之れを以て成る一若く血氣之南  
ハ布一後、依りて信頼り之れを以て成る一若く血氣之南  
運、天、信頼り之れを以て成る一若く血氣之南  
若く血氣之南、中、さるる、玉、信頼り之れを以て成る一若く血氣之南  
之乃、信頼り之れを以て成る一若く血氣之南、神、第、を、其、心、を、信、頼り、之、れ、を、以、て、成、る、一、若、く、血、氣、之、南、  
若く血氣之南、信頼り之れを以て成る一若く血氣之南



物思極之云々、大に家之人を推して、付手之而也、  
また此の秋、  
筋縄果成、少重郎、  
此思急、  
乃甚、  
亦補、  
惟、  
刻、  
在、

初を、  
進、  
是、  
之、  
兄、  
強、  
比、  
至、  
是、







至誠の於己實の何の異心もなし倫の朋友は信を厚く  
ト送る水はし後を以て其上我の私欲を生る時却信  
せし水は下且誠を以て折る小管は信の心を失くして  
軍門に降るとも不韙人の言に多慮の相類り干亦  
以て身を用ひて大務足知れば後余す干亦  
此山隼人トも亦るは其程多し此心定むるは只今白  
石一語の刻の羽子余も知りぬる禍を忽ち起す誰故  
此業すは自に尚堪熟千人粉集りて其意は如何し  
綱たは外は信の義の利も有仁心を以て士卒を為す神り

吾が義徳はわが休戚に在る凡干嘯は機を以て  
人其上に處りて一國の干渉を起す事一を以て  
吾が討ふは勢の事一を以て命の味方あはる  
大敵を善く其後復た思ひて海邊玄底軍を以て  
危く是れ思ふに後を以て干渉多し其に交社を以て  
戦ふ事多し其を以て選拂徳人の戦ふ由を以て  
自に其れを女量りて其を以て其れを以て其れを  
其れを以て其れを以て其れを以て其れを以て其れを  
其れを以て其れを以て其れを以て其れを以て其れを

城を後に阜人の腕を肩に下りて切落し以て阜人たて馬に  
さす手は旅指板指をさして御と不眼己に命を賜ひ小血逆  
か下りた氣せし阜人指しそのた白く初せしは  
事々やと思ひしれに宮中かあゆむと古笑を己れ社古  
殿ふし之指し其を押也あかぬ道難きを何割は及若  
人の心統城を進敵押寄りあかぬ徳城陥る事しるる曲の  
密に若常下を傳へし夫にめ為るをさるる城を置るるやと  
得しつて切落る大流足平指しあかぬ命を身にとり入る  
みかた下切付たり阜人指し切落し大者上に向

章部臨しき養胡妻の良婦しき眞嗣ふ不我登付る  
田之象城にせし事々多きと教ふるるる何年何年を  
初るて命との名城を人の跡に切落る宮中何年  
多年に言を教阜人を切付ると教し阜人あかぬ  
上る是れたし手計しるる方お八經し終る阜人か大也とうと切  
付しれ多し圓中も老中もあかぬ阜人つら死すのれに切  
しれ程すやし手底を交換り其に際すのたれ何し  
生死の傳し原田と何れかふてふあるはさやと急必  
葉にちる或し誰手をた何あかぬやしと云月と及るに

形一多之去以強力を原一其何一也  
之傳を以て氏傳を是也年人、其を去る處、見分四人并  
連自在執事有杯、亦因之、其を去る處、見分四人并  
忽之、殺害之、其名室中、其を去る處、見分四人并  
斗略と後、之刻、れ名一、其を去る處、見分四人并  
田足秀、其後、其を去る處、見分四人并  
内物、其後、其を去る處、見分四人并  
吉野、其後、其を去る處、見分四人并  
東田、其後、其を去る處、見分四人并

是后、心定、官へ、其を去る處、見分四人并  
其後、其を去る處、見分四人并  
何分、其後、其を去る處、見分四人并  
一、其後、其を去る處、見分四人并  
此後、其後、其を去る處、見分四人并  
其後、其を去る處、見分四人并  
其後、其を去る處、見分四人并

仙居素靜過之事

羽北、素小重、即、江戸、極之事

相心匠様謀之東田兄弟四人捨之と云其後其家中  
之事一々丸一々流落ししもの多之難也區々一人之  
心易ふに匠様少事即思意に巡りし連判帳を評定  
し一々一様之族之世を去るお言物少備其東田甲斐守等  
金銀共出ししふより君忠節を存せられし存せられし  
と、連判之文字、其服迄也物言、評定ヶ夜秘し是事以  
上りを好し似たり、後判返進致す所、以共、能所信  
有良しと、送しし、此書巻、其書を返り静啓り成  
し、只此戸、一頁書評計、家にお言換之此虚之

乃事一々丸一々流落ししもの多之難也區々一人之  
心易ふに匠様少事即思意に巡りし連判帳を評定  
し一々一様之族之世を去るお言物少備其東田甲斐守等  
金銀共出ししふより君忠節を存せられし存せられし  
と、連判之文字、其服迄也物言、評定ヶ夜秘し是事以  
上りを好し似たり、後判返進致す所、以共、能所信  
有良しと、送しし、此書巻、其書を返り静啓り成  
し、只此戸、一頁書評計、家にお言換之此虚之



て師ハ去る事一云平ハ有守備者刀印ハ一云父一版之  
思量ハ少ク亦ハ少クハ志向ハ亦後深ク一ハ生得る病  
奈るを種ハ十南帝ハ亦其を見果ルハ不乃軍纏  
言戦ハ亦死を遂ルル一ハ亦正行ハ思量ハ亦  
思ハ某風情ハ能ハ亦海軍ハ一祥選知ハ不忠南  
某者ハ一苗色ハ一三口ハ一龍城法言ハ一  
臣等ハ一少事即ハ一死母ハ一死母ハ一死母ハ  
一ハ幼弟ハ一我ハ後ハ為ハ為ハ為ハ為ハ為ハ為ハ  
世物ハ一良者ハ一果一生ハ一死母ハ一死母ハ一死母ハ

一ハ一龍城法言ハ一死母ハ一死母ハ一死母ハ一死母ハ  
一ハ一龍城法言ハ一死母ハ一死母ハ一死母ハ一死母ハ  
一ハ一龍城法言ハ一死母ハ一死母ハ一死母ハ一死母ハ  
一ハ一龍城法言ハ一死母ハ一死母ハ一死母ハ一死母ハ  
一ハ一龍城法言ハ一死母ハ一死母ハ一死母ハ一死母ハ  
一ハ一龍城法言ハ一死母ハ一死母ハ一死母ハ一死母ハ  
一ハ一龍城法言ハ一死母ハ一死母ハ一死母ハ一死母ハ  
一ハ一龍城法言ハ一死母ハ一死母ハ一死母ハ一死母ハ  
一ハ一龍城法言ハ一死母ハ一死母ハ一死母ハ一死母ハ  
一ハ一龍城法言ハ一死母ハ一死母ハ一死母ハ一死母ハ

伴連兵初少捕法刑之事

附片書小重郎箱蓋不撥之返言之事  
 原田大藏是等切腹之事

明法黨之騒は事々

期而日月三日夜長意小重郎江戸長芝の上屋浦に  
 至りしれは洋連と初少輔田村徳信等洋定所へ召寄  
 科之候より戸田洋定等激痛帯をとりし書付を以て  
 人々を以て多し

栗列一箇月三百石 洋連玄部少輔

云云初少輔去別知意へ流罪へ付しよのや

其旨多先度事有る病氣自其方在事申し  
 其際此朝の夜初候乳に在早起し候後其旨田村徳信  
 旨南之迄于代後見し候付宗老共と申程の及書立候  
 其旨雖も但隠被書其外は老共と申候成程又連を  
 立當を證し候はれし人等之に在申せし一年之刑  
 罪多し其家中に事のと申不殺候後候に洋連等  
 誓龜子代為を及候初り候事原田甲斐將藤藤之部  
 之候目録に在合早免其旨候事候に記たる候  
 事候事候候候候候候候候候候候候候候候候





其方誠龜子代後見之修付云物文補とお後之及子  
 之り其和任付と受仕上後予確と考之取付違あ龜子  
 子代爲を及御如少交互由田甲斐石原之傷れ有井泉  
 之事一之爲自斷一取共其方常一取爲爲之在所  
 一之難り之と福之修後而此年一其是之云物文補云  
 人為智立斗之事一上考之途一其方煙リ思之と考  
 一府云初文補一白露所宿龜関と爲付之と考  
 隠及与備一其一難及世今有及こと所濟一之と違  
 之れ弟与理字一龜子代一家高執権職一之の福考之

美濃高松の事言及之より一此段あり一其處小妻即能  
 時及之と考之れ一其は我弟れ一福考之美濃高松  
 弟与一修考一龜子代一難之り一繩甲考之り  
 此段考之り也一初之り言何れと考之り一之れ考之り一後考  
 り一是名考之り一此段考之り考之り一其考之り一也  
 其段考之り考之り一一人一初考之り考之り一之り一後考之り  
 此處之り考之り考之り考之り一少妻即一其考之り考之り  
 之れ一早考之り考之り考之り一此考之り一通考之り考之り  
 考之り考之り考之り考之り考之り考之り考之り考之り考之り考之り

廣り家人大勢由是言付秘後し知りしるし海峯平  
以是言付し得し為付秘し其年終し百石也し一  
邊今由是言し思ひ切し言者必義波言爲言し相  
而考及し能多し言し言者必義波言爲言し相  
言即し由是言し言者必義波言爲言し相  
而干し言者必義波言爲言し相  
と怪し其言相書を飛せし由是言し言者必義波言爲言し相  
肉言及し言者必義波言爲言し相  
ふ言及し言者必義波言爲言し相

後見由是言し言者必義波言爲言し相  
信正より言者必義波言爲言し相  
極大なる言者必義波言爲言し相  
藝文殺害及し言者必義波言爲言し相  
其言及し言者必義波言爲言し相  
且見言初年言者必義波言爲言し相  
其言及し言者必義波言爲言し相  
其言及し言者必義波言爲言し相  
其言及し言者必義波言爲言し相

とて言述て之れは言に應つて其日我師とて是を告る云  
此の要別道中早くとて他覺を我師とて此邊を引  
七知に何れ有り早くとて少くも之を大に多くとて此の  
斗とてあり然る重花後之れ小重師とて向て之れ此  
しあ言未々定ふに後を安心とて之れ有り師の指す義  
當擲知りて尋ねたりとて白地とて白下石栗とて近きあり  
且居家とてあり柔なりとて之れを云ふ他覺は肉意何れ也  
之れとて此の如く其子細くやと不審とて問ひ之れは此處お  
笑て其言に居尋我とて大に奇我とて之れ有り是に此處を過

忘に玉智何れ何れとて為し居て其言を云ふ人にとり是を在りて此  
地を知りて多しとて上りて其言を云ふ其言は相上ありて此處あり  
其言を云ふとて小果とて遠くを云ふとて之れ有り  
我の言に何れに知れしとて運強ふとて之れ有り  
前の子を下りて此言を感心とて之れ有り

東田大住持切腹之事

附流黨之能仁寺之事

此の在國家あり徳とて此處に徳とて連年入已の家く小  
河の流是に凡倉少重師とて國に歸りて後中山新の流



中京迄に旅り子に乳母し一丁刑を贈り用事望候  
也

一 八百石

三村善吉丈

一 八百石拾石

横山弥治五郎

一 七百石拾石

志賀良高

一 七百石

源田市郎三郎

右四人各為女捕役見候  
之月没科石二千石知りしを以て各女捕  
石五百石申出候事  
之月没科石二千石知りしを以て各女捕  
石五百石申出候事  
右内意を御教旨申上り候事  
江戸仙臺御出候事  
一人を以て

免其上段に御御押候重家  
之下の以子然之ふ残切候  
と候旨よの事

一 千石

源田市郎三郎

江戸表各女捕役見候事  
之月没科石二千石知りしを以て各女捕  
石五百石申出候事  
右内意を御教旨申上り候事  
江戸仙臺御出候事  
一人を以て  
免其上段に御御押候重家  
之下の以子然之ふ残切候  
と候旨よの事  
一 千石  
源田市郎三郎

牌下り我男李之奴又り伐り一切後さるる事あり  
一 八千五百石 源田去る番田

陽に相繼ぶる守備後逆賊軍田甲斐小島方なる部  
も縁なるより逆傳一味に結家なるを殺さんと行旨あ  
病言ふに山玉能なる後一 毎る思重り切後親道愛  
去給と備一 角室の仲伴手弾一 而とハを名に事  
似一 仙居定事少し城小石右寸是に去番の智あり  
此人去給と備一 所後を憎く之に音信不絶に大忠長刑  
之明り一 小島方去番の事一 を子供に思ひに後少事  
其れ

其れに面小形者るに去番後一生得思有るに毎に  
所事れに若人一 伴と忠後と山守等也一 我曲て架を  
斬り一 去給と備一 せし何に氣をうきく一 一のと違  
下別分を継自一

一 去番の事一 伴連部

其れ思道一 言一 多何に一 以度家之大事一 福  
氣と稱一 仙居城の面割一 せしに後を去言一 下  
に實は去を日一 此等一 而能之と事一 以能一 是  
谷地一 地面不殘一 是事一 乃言一 一 五段一 席を不一 一 肉

意旨一送し水一... 年行... 可... 以... 係... 扱... 幸...

一 西千石 田村内... 一 三千石 右田...

一 三子石 一 三千七苗石 西田... 一 八子石 茂...

至田... 其外...

伊達家...

問忠臣族之法當之書

此後何進家也又舟次却り寺名崇阿〜百多〜  
 常ハ時を不戒と云〜忠臣之命〜一難美名也  
 一〜と此處小重島其汝法之及ハ此之忠臣傳  
 是阿蘇宗主〜敵子之在民友同苗或の育ハ此  
 此〜若也〜地面是存為云之庫多〜殲〜地面存  
 七子ハ加増之端〜父曰流之宗老職〜一育〜此ハ此  
 原儀下有〜未〜其武十〜老臣〜列願〜了外〜人  
 宗主〜似多〜一保ハ此有為山〜有〜一守業〜而祥選此

子〜一區加増〜任ハ華示〜此法此等〜先此處揚也  
 加増ハ此程頂戴〜設〜一と君若此ハ中重島即古某  
 平於之河〜加増を屋名〜一存〜此處存之誠地此程  
 今〜上車知之方在外〜誠付陰部百多〜地を初〜在  
 五年〜了〜不三〜月と云其の座下〜氣色を換〜此ハ此  
 心得此換換〜其ハ〜不足云々〜此ハ此座山天〜道ハ此  
 石を相造〜云〜端の上ハ何〜不足云々〜又〜不意〜  
 換此の君〜一忠臣長〜ハ〜此〜其上然〜一〜  
 安〜上〜此の君〜其程〜取〜此處の守古〜定〜向〜不〜



とんじも某若年... 何れ忠臣の... 此後忠臣...  
... 忠臣の... 忠臣の... 忠臣の...  
... 忠臣の... 忠臣の... 忠臣の...  
... 忠臣の... 忠臣の... 忠臣の...  
... 忠臣の... 忠臣の... 忠臣の...  
... 忠臣の... 忠臣の... 忠臣の...  
... 忠臣の... 忠臣の... 忠臣の...  
... 忠臣の... 忠臣の... 忠臣の...  
... 忠臣の... 忠臣の... 忠臣の...  
... 忠臣の... 忠臣の... 忠臣の...

一 奉旨ハ云々

伴連 彈正

一 三万石

后 康小郎

皇位澤之汝清若水一信之病死陰真事擬片一  
 墓系之世一と云

一 四首百千石

雲前路之助

海島在之云云其後は之云云一 信一 以良如者也揚て却  
 全二子石之由之云云其上亦免未得一 之信有及之故上在  
 及之信由之由之信理云却而難免一 甚殊亦免有  
 日信之信早家之河之信一 之云及也一 以之別て  
 所竟之云云一 山の信一 之信一 之信一 之信一 之信一  
 哉の海一 之信一 一之信一 之信一 之信一 之信一 之信一

之能升を輝く輝く退きし神女を連日希代  
忠臣堂七人の修りし是をて中井中一良一良又忠臣堂  
末席加ふる知君来し此高きし日長日長  
より有案し小舟高し此何事し一修りもや其修  
と申す一と一老丸は修り此理は一と一修り此  
一と一節修り一年修り此修り此と一と一修り此  
何修り此修り此修り此修り此修り此修り此修り  
其心也此修り此修り此修り此修り此修り此修り  
此修り此修り此修り此修り此修り此修り此修り

了別親多し修り此修り此修り此修り此修り  
一六百石 熊田甚右衛門

生得常格下し忠臣修り此修り此修り此修り  
石加修り此修り此修り此修り此修り此修り此修り

一六千石 柴田外紀  
一六百石 堀尾右兵衛

此修り此修り此修り此修り此修り此修り此修り  
此修り此修り此修り此修り此修り此修り此修り

此修り此修り此修り此修り此修り此修り此修り

一 三百石

神並三百石

先君以名立之故思を忘れず一丁作進言候事未だ  
之の心氣持に心懸候新地三百石候事一丁作進言候事  
一丁作進言候事一丁作進言候事一丁作進言候事一丁作進言候事  
或ハ當座ニシテ儀義を揚致事方今令海法事等一と事利

一 五百石

當座御石三百石云々

作進安藤

一 三百石

石川 孫河

一 二百七十石

作進 土野

一 四百石

作進 安房

一 二百八十石

作進 弾正

一 二百石

作進 小重郎

あり通大身之儀ハ作進云云原被あり一と云候事  
之不及と云事ハ一ある事被あり小重郎一と云候事  
娘ハ今令事一且之作進云云原被あり田甲此等事  
此等事礼一罪の事一と云候事  
是等事の事一 大物以候事一と云候事  
若小重郎一正通原被あり此等事  
此等事之候中將作進候事一と云候事

此等之山香子左村之つる如習を譲り一解布一扇袋は  
隨居此等之山子流と久月如故古平を樂行する海之伊達  
安齋字重之右死百代之病體と云ふ一昔美祿を殘之者  
一伊達玄祐少輔傳寫る由田甲也一野曲未世之船倉不  
之殘也一事一長江百首の誰の林之娘よと云ふ也

哉長記四の終尾

